

記号論から生活記録運動へ——『思想の科学』の「跳躍」

榎原 理智

目次

はじめに

1. 『思想の科学』のターニングポイント
2. 最初期の『思想の科学』
3. 初期『思想の科学』における鶴見記号論
4. 敗戦直後の文学論争と〈アマチュアが書く〉こと
5. 鶴見記号論の含意するもの
6. 記号論から生活記録運動へ

はじめに

榎原理智と申します。実はしばらく生活記録からは遠ざかっていたのですが、その間に「政治と文学」論争を中心とする占領期の文芸批評を、アメリカの研究者とチームを組んで英語に翻訳するという仕事をやっておりました。そして今回この研究会に呼んでいただいたことで、生活記録運動に関わった知識人たちを戦後批評の文脈で見直すという新しい視座をいただいたと思っております。

占領期初期の言論界が異様に活気づいていたことは、多くの文学史家やメディア史家が指摘する通りです。さまざまなジャンルの新雑誌の創刊、戦時中休刊に追い込まれていた雑誌の復刊、単行本や選集の出版など、物理的な量としてメディアが増えましたし、哲学、化学、数学、教育学、物理学、文学、歴史、社会学、経済学といった異なった学術分野の間で対話が活発に行われていました。この「認定された言説空間」にいたプロの言論人たちは、いわゆるアマチュアの書き手・書き手予備軍が敗戦直後に大量に存在していることに対してむしろ自覚的でありました。戦後の「民主主義」の名のもとに、アマチュアの書き手たちの、いわば「認定されない言説空間」は、新たな「認定」の基準を求めていくことになります。

文学に関わるプロの言論人たちが敗戦の直後にまず行ったのは、戦争責任と政治に関する議論でした。戦時中に言論の自由を持たなかった左派の書き手たちがこれを

この「第一次」段階は、占領期の終焉とほぼ足並みを揃えるかたちで1951年4月にいったん終了します。生活記録運動にとってターニングポイントと呼べるのは、この次の「第二次」段階、つまり『芽』と改題された雑誌

先導することになりました。文学は何をすべきだったか、何をすべきでなかったか、文学は何をなしうるのか、そもそも文学とは何か——こうした問題が話し合われることによって、新たに文学の領域が定められ、その価値が規定されていくことになります。ではこの中でアマチュアが書くという行為はどのように位置づけられたのでしょうか。プロの書き手たちにとって、彼らの存在は自明なことでしたが、その書き物の価値は決して自明なことではありませんでした。しかし同時に、ある一部の言論人を除いて正面切って語る問題でもなかった。〈アマチュアが書くことの意味〉はむしろこれらの華やかな文学論争に影のように寄り添いながら、密かに作り出されていたのではないか。このようにイメージしてみると、その中で鶴見俊輔と『思想の科学』の位置づけはどうなるのか、それを考えてみたい、という思いに、私は捕われるようになりました。

本発表は、鶴見俊輔という一知識人の話になりますので、具体的にどのような運動が行われたかを実態に即して調査する研究とはかなり性質が異なります。また、鶴見俊輔という思想家を焦点にしているとはいえ、その思想を鶴見俊輔の全体においてとらえようとする研究とも、性質を異にしています。強いていえば、あまり顧みられることのない初期の『思想の科学』において鶴見が展開していた考え方が、その当時持っていたかもしれない可能性についての推論めいたものです。このへんをあらかじめお断りしておき、話を進めたいと思います。

1. 『思想の科学』のターニングポイント

周知のように『思想の科学』は鶴見俊輔を中心に、都留重人（1912-2006）、武田清子（1917-）、鶴見和子（1918-2006）、丸山真男（1914-1996）、武谷三男（1911-2000）、渡辺慧（1910-1993）という顔ぶれで1946年5月に創刊されました。まさに「政治と文学」論争や「戦争責任論争」が行われていた時期に、言論空間に登場するわけです。が1953年1月に建民社から刊行された時期だと思われます。この『芽』は一年しか続きませんが、ほぼ毎号「綴方広場」と題されたコラムを掲載し、それまでの子供の生活綴り方運動を大人のものにするにはどうすればよい

かという問題意識を鮮明に打ち出し始めます。この時期から『思想の科学』は生活記録運動のメディアとして自らを立ち上げようとしていくわけです¹。数は決して多くありませんが実作が掲載されるようにもなります。また組織としてもこの『芽』時代に大きな変貌を遂げています。同人 7 名と柳田国男や波多野完治といった継続的な書き手だけでやっていた形態を一新して、120 名からの会員を擁する「思想の科学研究会」を母胎とするようになり、これがその後も継続されていきますから、『芽』時代に『思想の科学』のもっとも特徴的な形態が整備されたと言ってもいいと思いますが、このあたりは道場さんの方がはるかに詳しいと思いますのでまたご教示いただきたいと思ひます²。1954 年からは竹内好を編集長に据え、講談社に籍を移して「新しい自立的な庶民思想を育てる」という明確な方針のもと、「一種のポピュリズムの時代」³を迎えます。この時期、姉・和子が生活記録運動の現場に積極的に関わっていく一方で、鶴見の関心は多方面に分散しており、和子のようなコミットメントの形をとりません。しかし、1956 年には久野収との共著『現代日本の思想』を上梓し、そこに日本の「共同の遺産目録」⁴の一つとして生活綴り方運動を白樺派や日本共産党と併置します。この著書で鶴見が提示した〈生活綴り方運動は日本のプラグマティズムである〉というテーゼは、その後運動を語る上で繰り返し参照されることとなります。

『芽』誌面に見られる大きな変化としては、大人の生活綴り方の他に、「自発性」への注視があります。『芽』の創刊号に掲げられている「発刊のことば」なるマニフェスト文では「自発的」という言葉が強調されています。「思想は、ひとりひとりの考えを通して自発的にたてられた場合にのみ、思想としての強さをもつのだと思います」「私たちは、自発的に民衆の中からそだってくる思想が、ほんとうの思想だと思います」⁵といった具合です。これ

はつまり、『思想の科学』が雑誌のなかで「自発性」を表象していくことを自らに課すと宣言したということです。それと呼応するように、ネイティヴィズムの傾向も強まっています。私たちはこの「自発性」を実体化せずには雑誌が創出しているものとして捉えて精査していく必要があると思いますが、それはまた別の研究になってしまうので止めておきます。しかし、生活記録運動を誌面に登場させるという選択が、「自発性」を創出するのに重要な役割を果たしていたことは、ここで確認しておいてよいと思います。これ以降、『思想の科学』はさまざまなものを「日本人」の「自発性」へ収斂させていく。つまり、「自発性」の表象をつくり出して、少々大げさな言い方をするとそれを「日本人」のものとするに雑誌をあげて専念していくことになる。「ひとりひとり」のものであると表象しながら、かつそれを「日本人」へ収斂させていくようなレトリックとロジックを駆使していくことになる。その結果ある種のネイティヴィズムへ入っていく。『現代日本の思想』にあるような、生活綴り方運動を日本のプラグマティズムだというようなところに持っていく。非常に大雑把な言い方ですがこういう流れになると思います。

一方、それ以前の創設期『思想の科学』はずいぶんと様相が異なります。私が戦後批評の文脈に興味を持ったのは、この最初期の『思想の科学』だったわけですが、ここから方向転換していくその道筋にはなにがあったのか、最初期にあったものはターニングポイント後にはなくなってしまったのか否か、そこにはどのような可能性が胚胎していて、何がなくなってしまったのか。そういうふうな問題を立てるとなにか見えてくるものがあるかもしれないと考えています。

2. 最初期の『思想の科学』

では最初期の『思想の科学』が意図していたもの、そして結果的に提示した思想的な枠組みというものとはどんなものだったのでしょうか。『思想の科学』の創刊号には「創刊の趣旨」がかけられています。まず第一に「論理実験的方法を採る」こと、第二に「世界の思潮を、我が国に移入することを専念」すること、次に「外国思想が、日本社会の分析及批評の具として、如何に使用され得るかを考え」ること、最後に「読者と執筆者との活発なる論議」を目指すこと。生活記録運動を念頭におくと、最後の文言が気になります。ここを読む限り、読者と執筆者が同じ地平に立って意見を交わすようなインタラクティブな雑誌が志向されており、いつでも読者が寄稿者

¹ 和田悠は「この時代には、思想の科学研究会は「生活記録路線」といって得るような方針転換をとげ」ていると論じている。和田悠「1950 年代における鶴見和子の生活記録論」(『慶應義塾大学大学院社会科学研究所紀要』第 56 号、2003 年 11 月)、80 頁。

² 安田常雄も『芽』時代を、「『思想の科学』らしい雑誌の原型が作られ、組織的に、たくさんの会員を擁することによって、相互討論が活発になり、多元的組織としての実質をもつようになった」時期と位置づけている。安田常雄『『思想の科学』・『芽』解題』、安田常雄・天野正子編『思想の科学・芽別巻 戦後「啓蒙」思想の遺したの』(久山社、1992 年)、227 頁。

³ 同上、229 頁。

⁴ 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦—』(岩波新書、1956 年)、ii 頁。

⁵ 思想の科学研究会編『芽』創刊号。次号からは「われわれの主張」として同じ文章が巻頭に掲げられる。

となることのできる窓口が設けられていることによって、単なる新聞の投書欄の域を超えたものにしようとする意気込みが感じられます。しかし結局のところ、執筆経験のないアマチュアの参入は初期『思想の科学』にはみられず、後に述べる『新日本文学』の場合のように、かれらに対して投稿に関する実践的な指導が行われるというようなこともありませんでした。少なくとも最初期においては、アマチュア参入の障壁は高かったといえます。むしろ、〈アマチュアの書く主体〉に関連があるのは、実は第一から第三のポイントなのです。

掲載された論文の内容を見てみると、最初期『思想の科学』がまず目指したのは、研究者のアカデミックな言語の解体でした。たとえば、創刊号には経済学者上田辰之助が「思想と表現」という一種の言語論を書いています。そこで上田は「世界をあけて言語の民主化が、顕著な現象となっている今日でも、術語だけはハイブラウな厳めしい古典語に頼っているのは一見時代錯誤の感がある」⁶と述べ、学術言語がどのようにジャーゴン化を免れるべきか、一般の人々に届けられるようにするにはどうなるべきかという問題提起を行っています。また、このような主張に呼応するように、表記に関する実験が誌上でさまざまに行われており、バートランド・ラッセルの『西洋哲学史』の合評をまったく漢語を使わずに掲載したりもしています⁷。敗戦後の言論界でほとんどお題目と化していた「民主化」という言葉を、学術日本語の改革という形で極めて具体的に示しているというだけでも相当先鋭的な雑誌だったわけですが、この背後にある理論として記号論を導入している点はさらに先鋭的であったと言えるでしょう。

鶴見俊輔は一般に「ひとびとの哲学」と呼ばれたアメリカ発祥の哲学、プラグマティズムを日本に紹介した人物として名高いのですが、1939年からのハーバード大学に在学中に受けた哲学的訓練はむしろ、ルドルフ・カルナップ（1891-1970）といったヨーロッパ出身の記号論学者による分析哲学のそれでした。この時期の記号論は、古典的プラグマティストであるチャールズ・パース（1839-1914）の影響を受けており、まったく関係がないわけではありませんが、記号論の方がはるかに精緻な術語体系を擁した分析システムを構築しており、初期の『思想の科学』において鶴見は、古典的なプラグマティストを扱う一方、米国の哲学界における最新の記号論を、言語に関する重要な学問的

成果として紹介しようとしていました。後述しますが、鶴見はこれを機械的に輸入するのではなく、自らの血肉となるような分析的・批判的な輸入を試みています。後にこの後者の試みはだんだん影を潜めるようになり、鶴見はむしろ古典的なプラグマティズムの推進者として自らを表象するようになります。

この時期の『思想の科学』の内容はほとんど顧みられることがありません。その最大の理由は、鶴見自身それがこれについて否定的だからです⁸。後になって鶴見はこの時期の『思想の科学』の試みについて分析的な批判を加え、インタビューでも否定的に語っています⁹。本日の私の焦点は、鶴見の記号論の枠組みと生活記録運動との「思想的な接点」を考えてみることにありましたが、私の試みは鶴見俊輔本人から「最初期の鶴見俊輔」を救う試みでもあるわけです。さらに付け加えるならば、生活記録運動と知識人との関わりにおいては、どうしても姉である和子の活動に目がいきます。和子は「自己改造」を生活記録運動の中心的な価値に据えたのみならず、自らが運動と関わるなかで「自己改造」を遂げたと語る人です。¹⁰その和子を横に置くと、鶴見の活動はいかにも自らの快適な空間から出ていない。むしろ和子の活動に対して批判的な評価もありますが¹¹、俊輔と比べた場合、和子が積極的に「現場」に出かけて関わったのに対し俊輔

⁸ 例えば後述する「言葉のお守りの使用法について」という創刊号の論文に対しては、1967年筑摩書房社刊の評論集『日常的思想の可能性』に再録する際「いやだった」と述べ、これが「占領批判の姿勢をしめしていながらも、占領下の占領批判というものが、どれほどむずかしいものかということ、生活の実感として理解していないということが、何となくその文体でわかる」のが「何よりいやなことだ」と書いている。「死んだ象徴」『鶴見俊輔集4 転向研究』（筑摩書房、1991年）、466-7頁。また、「創刊の趣旨」についても、「今、書きうつすのもつらい文章」と言い、第一、第二の項目については「外国からあたえられたものとしての方法と、その方法の適用される素材としての日本社会という考え方がある」と指摘して、「どうしてこんな趣旨に力こぶをいれたのかと情ない」と述べている。「素材と方法」『鶴見俊輔集4 転向研究』、480-481頁。

⁹ 鶴見は藤野寛と伊勢田哲治による「インタビュー『思想の科学』の原点をめぐって」（『思想』第1021号2009年5月）において、初期の記号論的論文の再評価を試みる二人に対して終始否定的な態度を崩していない。

¹⁰ 例えば鶴見和子『生活記録運動のなかで』（未来社、1962年）に所収されているエッセイ「生活綴り方教育に学ぶ」「主婦と娘の生活記録」等で「自己改造」が強調されているし、自らの自己改造に関しては「話しあい、書きあう仲間」がある。

¹¹ 先述した和田悠は和子の活動を野間宏の運動との関わりと比較しながら丁寧に位置づけ、「知識人としての立場性が「他者」によって実際には問われることのない」と和子の自己認識構造を批判的にとりだしている。和田悠「1950年代における鶴見和子の生活記録論」、83頁。

⁶ 『思想の科学』1巻1号（1946年5月）、1頁。

⁷ 『思想の科学』1巻3号（1946年11月）「バートランド・ラッセル『西洋哲学史』合評」。

は一步引いた場所にいた、というイメージで捉えられているように思います。確かに和子の積極的貢献はその功罪とともに見え易い。私が考えているのは、この俊輔の「一步引いた場所」の再評価ということでもあるのです¹²。

さて、文芸批評の領域において初期『思想の科学』はほとんど無視に近い扱いを受けています。華やかに繰り広げられていた論争の死角に『思想の科学』はあったのです。むろん、中心となっていた鶴見俊輔が当時若干 23 歳で無名であったこと、哲学雑誌として創刊されたこと、等の理由が考えられますが、言語と民衆の関係性に焦点化していたという点でも、マルクス主義への親和性という点でも、『思想の科学』は論争の中心となっていた雑誌群とさほど遠い位置にいたわけではないはずです。交渉があったとしてもおかしくなかった。それなのに完全に没交渉である。だからこそ『思想の科学』を見ていくことで、当時の文学論争が取り落としたものを逆照射できると私は考えています。

鶴見が導入しようとした記号論とは言ってみれば、言語記号とそれが誘発する行為との連環を考察・体系化することで言葉の働きを説明しようという試みで、分析哲学の流れを汲んでいます。分析哲学は、19 世紀末から 20 世紀にかけて発達した論理実証主義系の哲学の一派であり、言語哲学、とくに意味論をその中に含んでいます。もともとイギリス及びドイツ語圏で発達した学問ですが、戦争中に哲学者たちがヨーロッパからアメリカに亡命し、アメリカのハーバードに流れ込みました。鶴見が師事したカルナップはこの一群の亡命者の一人です。

一方プラグマティズムは、南北戦争後のアメリカ（特に 1870 年代）で発達した哲学流派で、思想の働きやその達し得る真理などがつねに人間の行動と結びつけて分析され、言語論の他に教育学や心理学といった領域にまたがるものです。鶴見が在籍した当時のアメリカのアカデミアでは、いわゆる古典的なプラグマティズムはほとんど読まれなくなっていたと言われています。鶴見が師事したカルナップを含めた論理実証主義の亡命学者たちは、古典的なプラグマティズムの再解釈を通してそこに新しい息吹を吹き込みネオ・プラグマティズムとして再生さ

せたわけです。そして鶴見はこれらヨーロッパの亡命学者たちのもとで最先端の記号論の訓練を積むことになりました。

日本において古典的プラグマティズムは戦前から導入されていましたが、戦後アメリカの意味合いが大きく変化したのを受けて「民主主義の哲学」として再登場します。清水幾太郎や後に鶴見の盟友となる桑原武夫がこの動きの中心におり、教育学や社会学から芸術に至る広い分野に応用可能な哲学として推奨されていましたが、鶴見は一枚岩のものとしてプラグマティズムを輸入することには批判的でした¹³。むしろ、鶴見の関心はそのうちの一分野である言語論と意味論を精査する方向に向いていたのです。

誌面を見る限り鶴見は、古典的プラグマティズムと最新の記号論的言語論を、バランスよく配置することに努めていたように思われます。むろん、これは最新の世界の思潮を輸入するという創刊の趣旨を反映した動きであるわけですが、鶴見はそれを機械的に「導入」して「応用」しようとしていただけではありません。また単に、「世界思潮」を批判することで最新の英米の哲学の中で自らのポジションを主張する身振りをしていたわけでもない。『思想の科学』最初期の記号論関連の著作は、術語を日本語に翻訳する段階から始まり、日本語の運用を分析するに当たってなにが足りないかを考える作業を通じて、日常を言語として捉え理論化するという、他にあまり類を見ない思考を生み出したのではないかと考えています。それは結果として英米記号論の方向からはずれていくことになり、鶴見を社会文化分析の方向に押しやることになりました。

3. 初期『思想の科学』における鶴見記号論

初期の著作を検討してみると、鶴見が記号論のどういふところに惹かれ、何に不満をいだき、そこにどのような改良を加えようとしていたかが見えてきます。鶴見は、1947 年 11 月の『思想の科学』にアメリカの記号論学者チャールス・W・モリス（1901-1979）の最新著作 *Signs, Language and Behavior* に対する長い書評を書いています。アカデミズムの読者を対象に、モリスが使用している 60 個に及ぶ術語を定義することに半分以上のページが割かれており、その中でも圧倒的に量が多いのが、言葉の意味とその運用を区別することに役立つ術語の説明です。

¹² この時期の鶴見の仕事に関して分析哲学への寄与という観点から再評価しようという動きもある。前掲の鶴見へのインタビューである伊勢田哲治は、鶴見がアカデミックな論理実証主義から次第に距離を置くことによって影響力のある思想家となったことを指摘しつつ、「だからといって、一九四〇年代から五〇年代のはじめにかけて確かに存在した「分析哲学者鶴見俊輔」を否定的に評価する必要はないはずである」と述べている。伊勢田哲治「分析哲学者としての鶴見俊輔」『思想』第 1021 号 2009 年 5 月

¹³ 鶴見俊輔「モリスの記号論体系」『思想の科学』第 2 巻 2 号（1947 年 11 月）。

これらは「イミ」と「ツカイミチ」に区別され、特に「トキクチ」と呼ばれる記号の運用者（会話においては発話者）がその場面に及ぼす影響を査定するための術語に丰厚的説明が加えられています。もともと記号論は、言語の意味を言語に内在するのではなく行為を促す要素として捉えており、ここが古典的プラグマティズムとも共通する前提となっています。鶴見はモリスの術語体系におけるこの部分が特に精緻だと評価しており、鶴見自身が発話の文脈と発話者の関係性を分節化する方法を模索していたことが裏付けられます。また、鶴見が一貫して意味が生成される場を分析するという視点を持っていたことを考えると重要な点ではないかと思えます。

しかし同時に、鶴見のモリスへの批判もこの部分に集中していました。なぜなら、鶴見が関心を持っていたのは意味が生成される場だけでなく、意味が変容していく場でもあったからです。モリスの記号論には時間軸がない。戦争をはさんで言葉の意味が大きく変容していく場に立ち会った鶴見は、その事態を分析するためにも、時間軸を導入し歴史とともに変容する言葉の意味を捉える方法を模索していたのでしょう。例えば『思想の科学』創刊号に掲載されている「言葉のお守りの使用法について」は、こうした鶴見の関心のありどころを直裁に示すものです。

「言葉のお守りの使用法について」は、記号論的なものの見方を、可能な限り学問用語に依拠せず戦中・戦後の言葉の使われ方の分析に適用しようとしたもので鶴見の戦後の出発点として注目されるものです。鶴見はまず、言語を「主張的」な使われ方と「表現的」な使われ方に分け、前者を「実験が論理かに依って、真偽を確かめ得る事を述べるもの」と規定し、後者をそれ以外とまず規定します。後者はさらに「（発話者の）ある状態の結果として述べられ、この伝達を通じて（被発話者に）何かの影響を及ぼす役目を果たす」ものと説明されます。「お守りの用法」とは「ニセ主張的」な用法と呼ばれ、後者の一角を成しているのですが、例として挙げられているのは、戦中であれば「鬼畜米英」や「国体」といった言葉、戦後であれば「自由」「民主」「平和」といった言葉であり、これらは意味が明確にならないまま使われ（発話者の状態）、それが使われることによってあたかも「お守り」のように、使う人間に力を与えてそれを災厄から守る（被発話者への影響）とされます。論文の後半は日本社会においてこうしたお守りの使用法が多く見られる理由を解明し、それを防ぐ方法を論じることに当てられており、

文明論としても社会批評としても読めるようになっていきます。

しかし、生活記録運動に繋がる道を探るにあたって重要なのは、論理実証主義科学から派生した記号論が志向的に曖昧さを排除する方向に行くのに対して、鶴見はその「曖昧さ」や「粗雑さ」それ自体を分析の対象とすることを考えていたということです。「曖昧さ」は通常否定的な意味合いで使われる言葉ですが、鶴見が念頭においていたのは、ニュー・クリティシズムと呼ばれるアメリカの文学理論家ウィリアム・エンブソンの『曖昧の七つの型』という著作ではないかと思えます。エンブソンは文学（特に詩）における「曖昧さ」を文学表現の特徴的なものとして高く評価し、それがどのように生み出されるのかを分析しています。エンブソンは積極的に記号論を組み込んだわけではありませんので、推測の域を出ないのですが、「曖昧」を対象にすると鶴見が言うときこの著作の視座があったと考えることにさほど無理はないと思えます。日常を言語として捉えること。その「曖昧さ」を見下すことなく理論化すること。生活綴り方はそうした日常が詰まったサンプルであったわけです。

4. 敗戦直後の文学論争と〈アマチュアが書く〉こと

鶴見の独自性をより明確にするために、ここでちょっと視点を変えて戦争直後の文学を巡る言論空間を見てみることにしましょう。よく知られるように、当時文学世界の中心にあったのは、『新日本文学』と『近代文学』という二つの雑誌であり、そのそれぞれのメンバーが華やかに「論争」を繰り広げていました。「新日本文学会」を母胎とする雑誌『新日本文学』は、正統的マルクス主義の芸術理論にのっとって新しい文学の担い手を「民衆」と規定していました。より重要なのは、それをコンテンツの中でそうしただけでなく、具体的に新しい書き手を創造する場を提供しようとしていたことです。それはまず、彼らに記録を書くことを奨励するという形で現れます。司会をしていらっしゃる中谷いづみさんは、『その「民衆」とは誰なのか』という御著書のなかで、初期新日本文学会のなかに「新人待望論」が強くあったと述べておられます。中谷さんはまた、『新日本文学』は新人を積極的に発掘するとともに「最もよい発表機関」となることが宣言されており、しかし同時にアマチュアの書き手の文章の価値については議論があった、と指摘しておられ

ます¹⁴。創刊当初の『新日本文学』におけるアマチュアの書き手の位置は、結論から言いますと決してプロの書き手の地位を危うくするものではありませんでした。アマチュアを評価したり鼓舞したり時には批判をしつつ、「推薦する」という立場にプロの書き手たちは自分たちを置くことになるからです。アマチュア作家たちの書き物は、職業作家に素材を提供するのであり、逆に言えばその限りにおいて認知されているのだと言えるでしょう。

もう一方の雄、『近代文学』はどうだったのでしょうか。ここには新たな書き手を市井に見出すような装置、あるいは自分たちの読み手を書くことへと誘う装置はまったくなく、この点においては『文学界』のような保守系の文芸雑誌とほぼ差異はありません。コンテンツを見ても、アマチュアの書き物を正面から取り上げた記述はまったくといっていいほど見られません。同人の一人荒正人は『新日本文学』に寄稿するときはアマチュアの書き物に言及していますが、『近代文学』の中ではまとまった発言はしていません。『近代文学』同人という雑誌が、自分たちの立場、すなわちプチ・ブルジョワ・インテリゲンツィアを文学の中心に据えることに拘泥していたというのは妥当性のある見方であると考えますが、同時に彼等が自らのブルジョワ性に意識的であったということを、彼等の沈黙の唯一の原因にすることはできません。『思想の科学』は自らのブルジョワ性に対して自覚的であっただけでなく、それを中和せんとする明確な意志を持って積極的にアマチュアの書き手を自分たちの雑誌に招き入れようとしていたわけですから、そういう道を取ることで出来たはずですが、『近代文学』は雑誌のコンテンツとしてもメディアとしてもそうした流れに与する事はありませんでした。このことは彼等が「民衆」を無視していたということではむしろありません。しかし、彼らが関心を寄せる「民衆」は、インテリゲンチヤとの関わりにおける観念的な「民衆」であり、従って実際の書き手としていちいち光をあてる必要性を感じていなかったのでしょう¹⁵。

¹⁴ 中谷いづみ『その「民衆」とは誰なの—ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、2013年）、141-143頁。

¹⁵ これをもっとも考えようとしていたのはおそらく「民衆とはたれか」（『近代文学』第1巻第4号、1946年4月）を書いた荒正人であっただろうと思われる。荒は旧左翼の人々が「民衆」を代弁すると言いながらその一方で彼等を理想化していることを批判して、プチブル・インテリゲンチヤの生活感情を持つ自分たちが民衆とどのように関わるべきかという問題を考え抜いていないと述べている。しかし、荒にとって重要なのはむしろインテリゲンチヤが彼等と関わることによって感じる感情と、その感情によってインテリゲンチヤが行う自己批判である。つまり、「民衆」は一種のスプリング・ボー

「政治と文学」論争でも、この問題は対立の論点として提出されることはありませんでした。それは『近代文学』の同人たちの問題設定の中から、実際にものを書く人々としての民衆が捨象されてしまっていたからであると考えられます。『近代文学』は『新日本文学』が次々に展開した勤労者文学なるものへの反対を表立って唱えることもなかったし、雑誌としてはひたすらアマチュアの書き物があたかも存在しないかの如く沈黙を守ることになりました。そしてまさにそのことによって、すなわちアマチュアの書き物に関する理論的な展開をうやむやにしたがゆえに、結果的にはそれに対して『近代文学』は消極的容認を与えることになったという構図ではないかと考えています。

5. 鶴見記号論の含意するもの

ではこうした文学界が看過した鶴見の記号論の可能性とはどういうものだったのでしょうか。現段階での仮説的なものであるということを再度お断りして、少々大胆にその意味するところを述べてみたいと思います。

まず鶴見記号論は、インテリの言語をノン・インテリの言語と同時に分析する可能性を秘めていた。最初期の『思想の科学』はそのコンテンツにおいて、アカデミックな言語の解体を目指していたことは先述した通りですが、鶴見の記号論には権力が言語を通してどのように作用するのかを問う視座がありました。これは例えばアカデミックな言語が権力を持ち得るような日常の発話の場面において、どのようにその権力がそれを持たない側に作用するのかを問うことができます。『思想の科学』に掲載された諸論文の多くは、アカデミズムの批判をしながら結果的には単なる文体論で終わるものだったのですが、鶴見の記号論は文体論を越えた可能性を持っていたと考えられるのです。さらに、こうした視座はコメンテーターの辻さんがしておられるように、生活記録運動の現場でインテリの言語をアマチュアの書き手たちが拒絶したり吸収したりするさまを、記述する方法をも提示するでしょう。

もう一つの理論的な可能性として、少し乱暴な言い方になりますが主体の問題が媒介の問題へと変換されていくことが挙げられます。このようなパラダイムでは、人はそのときどきの記号の使い手としてしか扱われず、しかもつねに変化していく関係性の中にとらえられた存在ですから実体化されにくい。「大衆」も一枚岩のマスとし

てはとらえられにくいし、発話も単純にそのまま思想の発露ということにはなりません。このような枠組みにおける記述の関心は、むしろその記号の交換がどのような社会的な関係の中で、どのような力関係の中で行われたかに向かうことになります。そうした文脈がなければ、個々の発話の意味を限定することができないからです。鶴見は生活記録運動に積極的に関わり始める 1950 年代全般にわたってコミュニケーション論を書いています、記号の送り手と受け手によって作られる伝達回路を経て意味が生成されるという鶴見の記号論的認識があつて初めて可能だったものだと考えられます。

さらに付け加えるならば、こうした分析は「よい・悪い」の評価をいったん棚上げにして行うことができます。生活記録運動であれ、文学作品であれ、労働者が書いたものであれ、学者が書いたものであれ、評価フリーの分析が可能になるわけです。こうした方法においては、生産されたテキストがすぐれた表現であるか否かを問う必要がない¹⁶。このことは特に当時の文芸批評にとっては重要な意味を持ちます。マルクス主義的な文学観からも文学主義的な文学観にも影響されずに、書かれた作品のある種の例として見る事が可能になるからです。このことは逆に言えば、書かれた作品をそれぞれの評価基準に従って価値付けしていくことで自らの場所を獲得していた文芸批評にとっては、拠って立つ場所を奪われたも同然です。ある種の政治的な価値を意識的に排除することで文学的な価値なるものを積極的に創り出そうとしていた『近代文学』や、新たな政治的価値を構築しようとしていた『新日本文学』に鶴見記号論が黙殺されるゆえんはここにあったのだと言えそうです。

こうした可能性が状況に対してプラスに働くのか、マイナスに働くのかは、状況と目的次第でしょう。マルクス主義の影響を遠ざけることはできるかもしれませんが、政治的な主体に対して常に懐疑的になるような事態が起こるかもしれない。これは政治的な主体を立てることが必須なアイデンティティ・ポリティクス場には向きません。さらに、記号論的な考え方を私が述べたような方向へ押し進めると、「自己改造」という概念を構成することができなくなります。「改造」するべき自己が明確な形で存在しなくなるからです。生活綴り方運動・生活記録運動に関わるなかで、鶴見が方向転換をしたとするなら

ば、記号論の中にあつたこうした「可能性」こそ鶴見にとって障害物になったからではなかったか、という推測ができます。

6. 記号論から生活記録運動へ

最後に、先述した『現代日本の思想』から生活綴り方を鶴見がどのように描き出しているか、見てみることにしましょう。これは『芽』の発刊がいったん停止した後、鶴見が書いた生活綴り方に関するもっともまとまったものと言っていきたいと思います。

ここで鶴見はプラグマティズムを「思想を行動とたえず交流する状態において、思想に新しい養分をあたえて内容をこやし、また思想の方法が動脈硬化におちいらぬように、毎日の生活上の応用問題を与えて方法をしなやかにする思想流派」¹⁷とまとめています。しかし、このアメリカにおけるプラグマティズムが理論から運動へという順序を持っていたのに対して、日本の生活綴り方運動は「行為（プラグマ）が思想に先んじることを主張する立場」をさらに一歩押しすすめ、「哲学史上のプラグマティズムよりも、もっと徹底的にプラグマティックな運動の形をもつ」¹⁸たことを評価しています。これは鶴見和子が言うところの「自己改造」の部分でしょう。さらに鶴見にとって重要なことは、これが「輸入思想」によって誘発されたものでなく、「自発的」に始まったものだというところです。

こうした鶴見の生活綴り方運動の規定が妥当であるかどうかを議論することは、いまの私の関心ではありません。私が面白いと思うのはここで鶴見が駆使しているレトリックとロジックです。つまり、「輸入思想」と認知され得るものが欠如している状況イコール「自発性」だとされている部分です。記号論は鶴見のモリスへの書評に見られるように、基本的に術語体系によって構成された分析ツールです。これらはもともと英語で作られている。そしてそれを日本語に移し替えるという作業が必要です。これを「輸入」と見なすのは容易い。しかし、古典的プラグマティズムはその教義の性質上、土着の運動と切り離しては成立しません。「間接的な道すじでつながっているのだが、そのつながりかたが、他の思想流派におけるような紹介輸入の仕方によってでなく、この土地に根ざした運動を二十年ほど続けた上での交流である」¹⁹という

¹⁶ 私は鶴見が評価を下さなかったと言っているわけではなく、方法に可能性が萌芽していたと述べている。

¹⁷ 鶴見俊輔・久野収『現代日本の思想』、73 頁。

¹⁸ 同上、75 頁。

¹⁹ 同上、93 頁。

22 記号論から生活記録運動へ

意味づけが可能なのです。初期に鶴見がもっとも高く評価した精緻な記号論の術語体系は、ここにおいて十把一絡げに「輸入」品として排除され、そのように排除されることによって生活綴り方運動は日本の「土着」の運動であり、「自発」として表象されることになったわけです。

しかしその一方で、鶴見は完全に記号論的な考え方を放棄したわけではありません。例えば以下のような文章には、「言葉のお守りの使用法」で展開された議論と呼応する部分があります。「平和」とか、「国土防衛」とか、「民主主義」、「自由」などの抽象的な意味をもつ諸記号はそれが誰によってどのような条件で言われたのかとむすびつけて意味内容をにくづけすることによって、プラグマティックなものとすることができる²⁰。これは、マス・コミュニケーションによって膨大な量の記号が送られて来る現代人にとってのリテラシーの重要性について語られた部分ですが、こうした「訓練」が学校でなされることによって、「新しいプラグマティズムの誕生が準備される」と述べています。発話のコンテキスト（＝誰によってどのような条件で言われたのか）を考えることの重要性は、決して記号論学者のものだけではないし、会話の場面のみに必要なものではない。生活綴り方・記録運動における書く行為のダイナミズムは、記号をその運用方法の条件とともに考えるという記号論的方法によって実はもっともよく記述され得るとも言えるのではないでしようか。

鶴見姉弟に限らず、生活綴り方・生活記録運動と知識人との関係性はその時代性を反映して、そもそもが緊張をはらんだものでした。しかし、その関係性については、多くの場合簡単に実体化されてしまう傾向にあると感じています。和子の積極的な身振りも、鶴見の分析的な立場も、「人となり」のような物言いに回収されがちであるということです。しかし、それをしてしまうとわかりやすく倫理的な問題が惹起されてしまい、鶴見の「一步引いた場所」の意味を矮小化・誇大化してしまうことになりかねません。そうならぬよう、私の発表が多少なりとも問題提起になっていれば幸いです。

【付記】この文章は、研究会での発表を当日のコメントを受けた形で再構成したものである。また、内容は2013年3月にAssociation for Asian Studiesで行った口頭発表と一部重複するものであることをお断りしておく。

（さかきばら りち・早稲田大学）

²⁰ 同上、107頁。

